

(17) 以下の通り訂正いたします。

P118 共同発表者削除

誤

11) 看護学生の教員および実習指導者に対する信頼感の違いにおける実習適応感の差の検討

○龔 恵芳¹, 竹田千佐子¹

¹兵庫医療大学

【目的】

臨地実習において、看護学生と学校の教員および臨地の実習指導者との関係性に焦点をあて、看護学生の教員および実習指導者に対する信頼感の違いが、看護学生自身が主観的に臨地実習に適応しているのかどうか、すなわち、実習適応感に差があるのかを検討する。

【方法】

統合実習を除く全ての臨地実習を終了した6校の看護学生4年生470名を対象に、質問紙調査を実施した。使用された尺度は、「実習適応感尺度（5件法）」「教員に対する信頼感尺度（4件法）」「実習指導者に対する信頼感尺度（4件法）」であった。質問の教示方法については先行研究を参考に、「今まで経験された実習の中で、あなたが一番心に残っている実習」を回答前に示した。分析方法は、初めに教員および実習指導者に対する信頼感低群と高群に分類し、それぞれに対する実習適応感の平均値（標準偏差）または中央値（四分位範囲）を算出した。最後に教員および実習指導者に対する信頼感低群と高群の実習適応感の比較には差の検定を行なった。統計解析はSPSS (Statistics22) を使用し、有意確率は5%未満とした。倫理的配慮として、調査対象者へは口頭と文章を用いて個人が特定されないこと、成績に関係しないことなどを説明し、質問紙への記入と返信をもって同意を得たものとした。また、兵庫医療大学倫理審査委員会の承認を受けた。

【結果】

309名(65.7%)から回答を得た。回答に不備があるものを除き、294名(95.1%)を分析対象とした。調査対象者の属性は、男性33名、女性261名、平均年齢21.73歳(1.58)であり、入学形態は全員学士入学であった。教員に対する信頼感低群の実習適応感の平均値3.16(0.58)、教員に対する信頼感高群の実習適応感の平均値3.52(0.53)、実習指導者に対する信頼感低群の実習適応感の中央値3.23(0.70)、実習指導者に対する信頼感高群の実習適応感の中央値3.53(0.82)であった。教員に対する信頼感低群と高群の実習適応感に差があるのかについては対応のない t 検定、実習指導者に対する信頼感低群と高群の実習適応感に差があるのかについてはMann-Whitney検定を行なった。その結果、看護学生の実習適応感は、教員および実習指導者に対する信頼感低群と高群との間で有意な差がみられ、両群共に信頼感高群の実習適応感のほうが高かった【 $t(292) = 5.69, p < .01$ 】【Mann-Whitney $U = .00, p < .01$ 】。

【考察】

看護学生の教員及び実習指導者に対する信頼感は、信頼感高群のほうが低群より臨地実習に適応していることが明らかとなった。このことから、看護学生と教員および実習指導者との信頼関係は、看護学生の学習基盤を形成するだけでなく、実習適応感にまで影響を及ぼすことが示唆された。よって、看護学生が実習適応感を高くもって臨地実習に臨むには、看護学生の教員および実習指導者に対する信頼感が必要不可欠である。

正

11) 看護学生の教員および実習指導者に対する信頼感の違いにおける実習適応感の差の検討

○龔 恵芳¹

¹兵庫医療大学

【目的】

臨地実習において、看護学生と学校の教員および臨地の実習指導者との関係性に焦点をあて、看護学生の教員および実習指導者に対する信頼感の違いが、看護学生自身が主観的に臨地実習に適応しているのかどうか、すなわち、実習適応感に差があるのかを検討する。

【方法】

統合実習を除く全ての臨地実習を終了した6校の看護学生4年生470名を対象に、質問紙調査を実施した。使用された尺度は、「実習適応感尺度（5件法）」「教員に対する信頼感尺度（4件法）」「実習指導者に対する信頼感尺度（4件法）」であった。質問の教示方法については先行研究を参考に、「今まで経験された実習の中で、あなたが一番心に残っている実習」を回答前に示した。分析方法は、初めに教員および実習指導者に対する信頼感低群と高群に分類し、それぞれに対する実習適応感の平均値（標準偏差）または中央値（四分位範囲）を算出した。最後に教員および実習指導者に対する信頼感低群と高群の実習適応感の比較には差の検定を行なった。統計解析はSPSS (Statistics22) を使用し、有意確率は5%未満とした。倫理的配慮として、調査対象者へは口頭と文章を用いて個人が特定されないこと、成績に関係しないことなどを説明し、質問紙への記入と返信をもって同意を得たものとした。また、兵庫医療大学倫理審査委員会の承認を受けた。

【結果】

309名(65.7%)から回答を得た。回答に不備があるものを除き、294名(95.1%)を分析対象とした。調査対象者の属性は、男性33名、女性261名、平均年齢21.73歳(1.58)であり、入学形態は全員学士入学であった。教員に対する信頼感低群の実習適応感の平均値3.16(0.58)、教員に対する信頼感高群の実習適応感の平均値3.52(0.53)、実習指導者に対する信頼感低群の実習適応感の中央値3.23(0.70)、実習指導者に対する信頼感高群の実習適応感の中央値3.53(0.82)であった。教員に対する信頼感低群と高群の実習適応感に差があるのかについては対応のない t 検定、実習指導者に対する信頼感低群と高群の実習適応感に差があるのかについてはMann-Whitney検定を行なった。その結果、看護学生の実習適応感は、教員および実習指導者に対する信頼感低群と高群との間で有意な差がみられ、両群共に信頼感高群の実習適応感のほうが高かった【 $t(292) = 5.69, p < .01$ 】【Mann-Whitney $U = .00, p < .01$ 】。

【考察】

看護学生の教員及び実習指導者に対する信頼感は、信頼感高群のほうが低群より臨地実習に適応していることが明らかとなった。このことから、看護学生と教員および実習指導者との信頼関係は、看護学生の学習基盤を形成するだけでなく、実習適応感にまで影響を及ぼすことが示唆された。よって、看護学生が実習適応感を高くもって臨地実習に臨むには、看護学生の教員および実習指導者に対する信頼感が必要不可欠である。